

知覚と運動の役割分担

二〇〇七年七月九日、われわれ一行は、関西空港から帯広空港に向かった。一行とは、わたしと田上仁志さん、そして、アシスタントの北畠和明さんと中村伸

夫さんの四人である。
田上さんは、民博の研究スタッフと共同して資料を収集・保存する情報管理施設の専門職員である。民博創立のころから映像収集を担当し、数々の撮影取材をこなしてきた。プロのカメラ

に耳をします。中村さんは、照明が本來の担当だが、カメラやマイクから離れない二人にかわり、他にもさまざまな作業をこなす。バッテリーやテープの交換、三脚の移動、カメラマンの足場の支持車の運転などである。

こうした役割分担においては、「目」の役割をはたす田上さんと、「耳」である北畠さん、さらに両者をサポートする中村さんは、あいだで、息が合っていないけれど、お互いを力バーし合う。三人はいわば、ひとつの知覚系統となつて、記録を進めしていくのである。

一方わたしは、機材に拘束されない点で、中村さんと同じ立場にある。ただ、中村さんが知覚系の一部であるのに對し、わたしは、撮影地の人たちに對して積極的に働きかける。カメラに写る人々の撮影許可をえたり、カメラの前で話しゃやすい雰囲気を作つたり、といった根回しがわたしの分担である。知覚系がよりよい情報を拾えるよう、運動系統として周囲に働きかけるわけだ。

とはいっても、知覚系が最大限に機能するよう、わたしもまた三人の動きを理解

マンとして、民博になくてはならない人の一人である。

北畠さんは、マイクが担当。カメラが写す映像に無関係な音を拾わないよう、カメラの動きに注意しながら、ヘッドホンに耳をます。

中村さんは、照明が本來の担当だが、カメラやマイクから離れない二人にかわり、他にもさまざまな作業をこなす。バッテリーやテープの交換、三脚の移動、カメラマンの足場の支持車の運転などである。

こうした役割分担においては、「目」の役割をはたす田上さんと、「耳」である北畠さん、さらに両者をサポートする中村さんは、あいだで、息が合っていないけれど、お互いを力バーし合う。三人はいわば、ひとつの知覚系となつて、記録を進めていくのである。

一方わたしは、機材に拘束されない点で、中村さんと同じ立場にある。ただ、中村さんが知覚系の一部であるのに對し、わたしは、撮影地の人たちに對して積極的に働きかける。カメラに写る人々の撮影許可をえたり、カメラの前で話しゃやすい雰囲気を作つたり、といった根回しがわたしの分担である。知覚系がよりよい情報を拾えるよう、運動系として周囲に働きかけるわけだ。

とはいっても、知覚系が最大限に機能するよう、わたしもまた三人の動きを理解

するよう努力している。映像取材とは、そうしたチームワークのもとで進む共同作業なのである。

今回の取材の主目的は、関西であり知られていない北海道日高地方のコンブ採取の現場を記録することだった。しかし、コンブ採取シーズンをねらつて取材地に滞在した一〇日間のうち、コンブ採取したのは一日だけだった。しかも、採取した時間も短く、収穫を喜ぶ場面はうちに撮影しようというわたしの見通しは、みごとに裏切られてしまった。

ただ、取材が無駄だったわけではない。天気が悪くて「コンブ」を採取しない日にも、撮影すべきことがあった。たとえば、こうした日には、村の誰かが抜け駆けして採取することのないよう、役職につけた人が、漁港の旗竿に赤旗を掲げて合図する。この役職は「旗持ち」とよばれ、漁業組合の話し合いで選ばれる。この人が自らの役目を語る場面は、「コンブ採取の状況を理解してもらううえで重要だつた。

少し早い時間に、まず、わたし一人で旗持ちの家を訪ねてみる。今日は採取をおこなわない、二〇分ほどしたら漁港に行つて赤旗を上げるというので、わたしに太刀打ちできる見込みはない。

二〇〇〇年の二次利用まで見越して映像資料を残す点で、民博は、日本の最先端をきつていいる。NHKが公開している映像アーカイブにしても、放送前に粗編集した映像ではなく、撮影状況を解説するための材料に乏しい。民博の映像は、完璧ではないにしろ解説の手がかりが豊富だし、関連した文字資料も残されている。開館三十周年を経て、その価値は、確実に増している。

収穫の喜びは撮影できなかつたが、天気を心配する漁師の声や、雨の日の仕事はふんだんに撮影できた。そして何より、採取待ち焦がれる漁師たちの気持ちを、われわれ撮影班が親身に理解できた。この結果、絵になる場面の寄せ集めではわからない、時間の流れに根ざした生活実感を記録できたと思ふ。この利点を生かして、番組編集にとり組んでみたい。

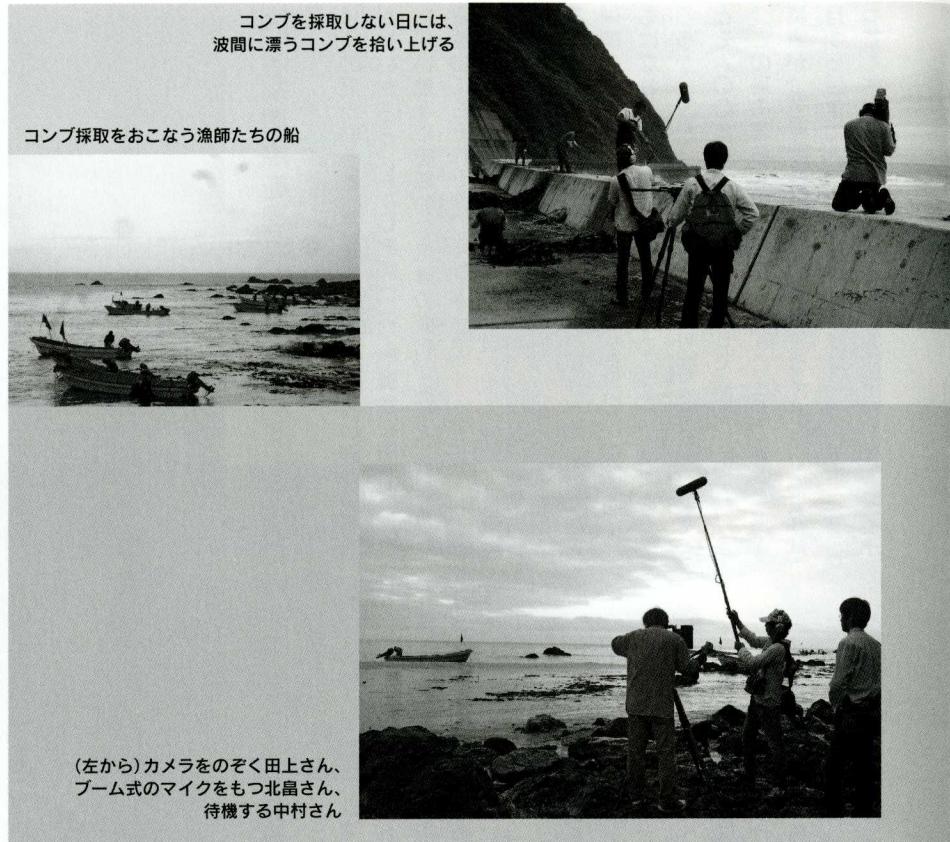
なお、編集の実務は、田上さんの担当である。研究スタッフが提案した多数の取材をこなす合間に、彼は、ひたすらモニターに向かっている。民博の映像制作環境は、けつして優雅ではない。

アーカイブのための映像作り

テレビ取材なら、取材前に予期した場面を撮り逃すことは、致命的な失敗だろう。番組の主張に沿うような場面を、台本どおりに集めることが取材目的だからだ。場合によっては、「絵になる」場面を確実に撮影するため、複数のカメラを準備することもある。

いっぽう、民博の映像制作は、まつたくちがつた点を重視する。ビデオテープ番組では、絵になる場面を「いいところでり」することもあるが、それは民博の映像制作のごく一部にすぎない。民博が収集した映像の価値は、ひとつの場面をえんえんと撮る「長回し」を多用していることにある。長回しは、テレビ取材では無駄なものとして切り捨てられるが、現地で何が起こったか理解するうえでは、貴重な手がかりを提供する。

たとえば、テレビ撮影なら、旗持ちへのインタビューが終わってから車を撮り続ける必要はない。しかし、インタビュー前後の場面があれば、粗編集の映像を研究資料としたり、一〇〇年経つて史

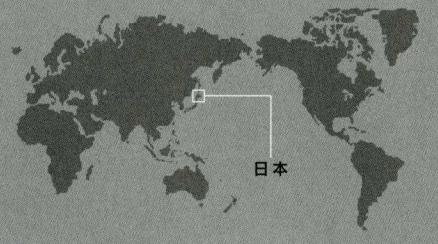


海の仕事の映像収集

地球を 集める

飯田 駿 (いいだ たく)

本館研究戦略センター



は、携帯電話で田上さんに連絡をとつた。そして、赤旗を上げるところを撮影し、その後にインタビューさせてもらつよう、旗持ちに頼み込んだ。

われわれは、旗持ちよりひと足早く漁港で落ち合つと、すばやくカメラ位置をさだめ、三脚にカメラを装着した。北畠さんが、車からとり出してきた白い板を

胸のあたりに掲げ、田上さんは、その板にレンズを向ける。ホワイトバランスを調整しているのである。中村さんは、カメラの画角に取材班の車が写らないよう、建物のかけに車を移動している。

ほどなく旗持ちが車で漁港に到着し、赤旗を上げた。打ち合わせに反して帰

われわれは、旗持ちよりひと足早く漁港で落ち合つと、すばやくカメラ位置をさだめ、三脚にカメラを装着した。北畠さんが、車からとり出してきた白い板を

港で落ち合つと、すばやくカメラ位置をさだめ、三脚にカメラを装着した。北畠さんが、車からとり出してきた白い板を